日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

所属部局・職	霊長類研究所、PWS 履修生 1 年
氏　名	戸田和弥

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

日本モンキーセンター

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

動物園実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

H26, 10/7 ～ H26, 10/10　（4 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

日本モンキーセンター

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

博物館としての動物園と、その研究員の役割を学ぶことを目的とし、日本モンキーセンターにて、動物園・博物館実習を行った。

伊谷園長から、霊長類学および日本モンキーセンターの歴史について説明を受けた後、綿貫さんに園内を紹介していただいた。モンキーセンターを訪れたことがなかったので、新鮮な気持ち楽しむことができ、ただただ面白かった。

2 日目は、飼育実習として、ゴリラとマンドリルの屋内展示場の清掃を行った。当然衛生面は重大な問題であるので、清掃に配慮した構造の必要性を感じた。その後、獣医室でニホンザルの解剖を見学した。解剖の主な目的は死因の特定であるが、標本を残すこともまた博物館として重要な仕事であると教わった。臓器をしっかり見る機会は初めてで、体内での配置を理解するための良い機会となった。次に、標本実習として、骨格標本や内臓の保管のための作業を新宅さんに教わりながら行った。

3 日目、午前中の講義の後、綿貫さんによる指導の下、エンリッチメント実習を行った。今回は、切り取った竹に手を加え、餌を詰め込んだ。これは動物たちの採食にかける時間を延ばすことが目的である。ゲージの中では、自然状況と比べると、行動の自由度は下がるため、探索等を含む採餌行動を引き出す工夫が求められそうだ。作ったものを飼育員の方にアカゲザルゲージに設置していただき、その採餌の様子を観察した。餌を取ろうと懸命なのだが、両方に引っ張るような力を加える必要があるものを作ったので、彼らの小さな手では難しいようであった。その種の適したものを作る必要があることがよくわかった。

最終日、小学生を対象とした学習授業の見学をした。その中で、小学生からの質問への回答を分担させていただき、自身が霊長類の動物について無知であること、小学生に伝え

るむずかしさを実感した。今後も、研究に携わる者として、動物の説明を求められる機会は多くあると思う、その際に正確な情報を分かりやすく伝えることができるよう精進したい。

本実習では、伊谷原一先生、木村さん、高野さん、大橋さん、新宅さん、綿貫さん、赤味さん、坂口さんに指導していただきました、深くお礼申し上げます。また、モンキーセンターのスタッフの方々には大変お世話になりました、心より感謝しております。ありがとうございました。

６．その他（特記事項など）